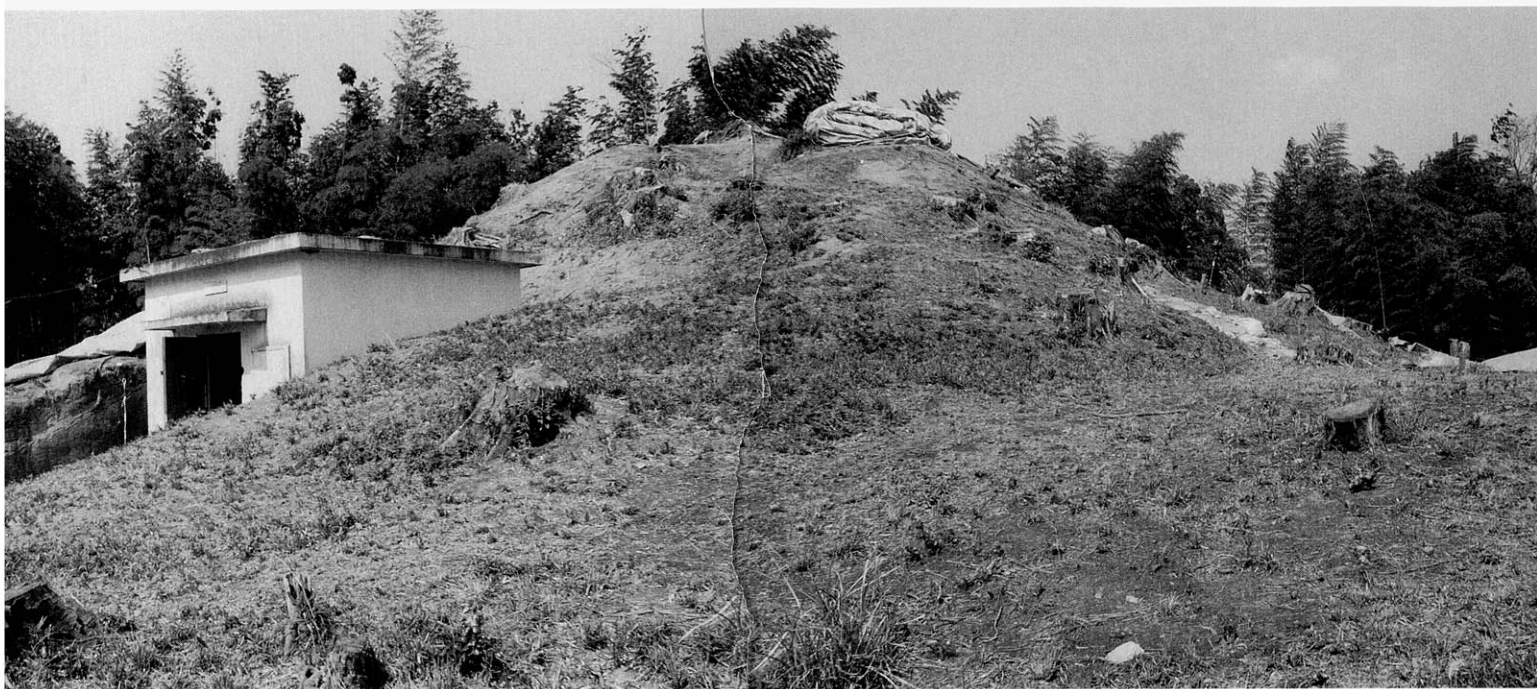


五郎山古墳

—— 第 1 次発掘中間報告 ——

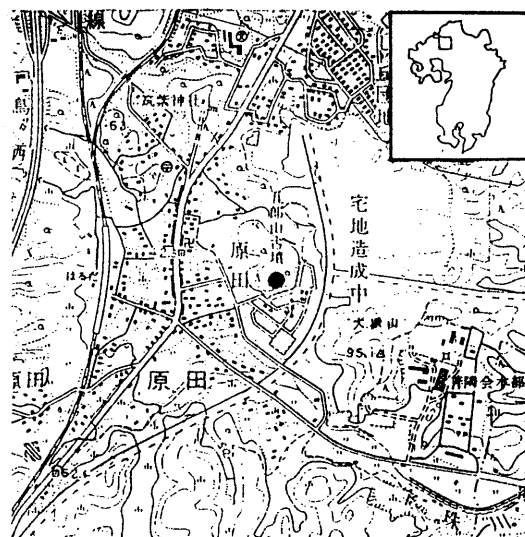


1 9 9 6

筑紫野市教育委員会

例 言

1. 本書は福岡県筑紫野市五郎山古墳の史跡整備に関する発掘調査の中間報告である。
2. 発掘調査は筑紫野市教育委員会の委託を受けて、福岡大学人文学部考古学研究室（教授 小田富士雄，助教授 武末純一）が行なった。
3. 調査期間は1995年2月20日から3月8日までの17日間である。
4. 本書は調査と整理作業に参加した福岡大学考古学研究室の学生・大学院生の協力を得て、小田の監修のもとに武末がとりまとめた。
5. レベル高はすべて海拔で記し、図中の方位は磁北である。



第1図 五郎山古墳位置
(1 : 25,000)

1. 調査にいたる経過

五郎山古墳は福岡県筑紫野市原田3丁目9番5号に所在する国指定史跡の装飾古墳である。

本古墳はこの地域における最大級にして二段築成の外観をもつ円墳で、前・後二室からなる複室構成の横穴式石室である。後室奥壁とその左右両側壁や前室の後壁に、赤・緑・黒の三色で各種の図像が影絵風に描かれている。

1947年10月、土地所有者が墳頂部の陥没部から横穴式石室の内部に入り壁画を発見した。同年11月、福岡県教育委員会は鏡山猛・森貞次郎・小林行雄氏らに石室と壁画に関する記録作成調査を委嘱した。

その後、本古墳は1947年7月に国指定史跡となり、1950年度に墳丘の整備が行われた。さらに1959年石室羨道前面に覆屋や説明板を設けて今日にいたっている。

近年、筑紫野市は本古墳周辺を近隣公園として整備をすすめるなかで、荒地状態にある本古墳の整備と破損が進行しつつある石室の保護のため、国・県の関係機関ともはかって1993年に「五郎山古墳史跡整備基本計画策定委員会」を発足させた。同委員会はまず検討のための基礎的資料を収集するなかで、墳丘・石室再調査の必要性が認識されてきた。そこで筑紫野市は1994年度に墳丘復原のための発掘調査を福岡大学に委託することとなった。

発掘調査は福岡大学人文学部考古学研究室が主体となって1995年2月20日から3月5日まで2週間の予定で実施されたが、雨天などのため順延して3月8日に終了した。

〔調査組織〕

調査担当	小田富士雄（福岡大学人文学部教授）	武末純一（福岡大学人文学部助教授）
調査員	福岡大学 釜瀬明宏（大学院生）・境靖紀・中野聡子・甲斐孝司・芳賀美智子・平古場豪（学部生）	
	専修大学 荒井吉正（大学院生）	
	京都大学 山本圭二（大学院生）	
調査・庶務担当	奥村俊久（筑紫野市教育委員会社会教育課文化財担当主事）	
調査協力	専修大学 土生田純之（文学部助教授）	
	福岡大学 山口亨（大学院生）・是田敦・東哲史・佐藤信・安部紋美・井田まゆみ・中原周一（学部生）	
	春日市教育委員会 古川千賀子（文化財課文化財係技師）	

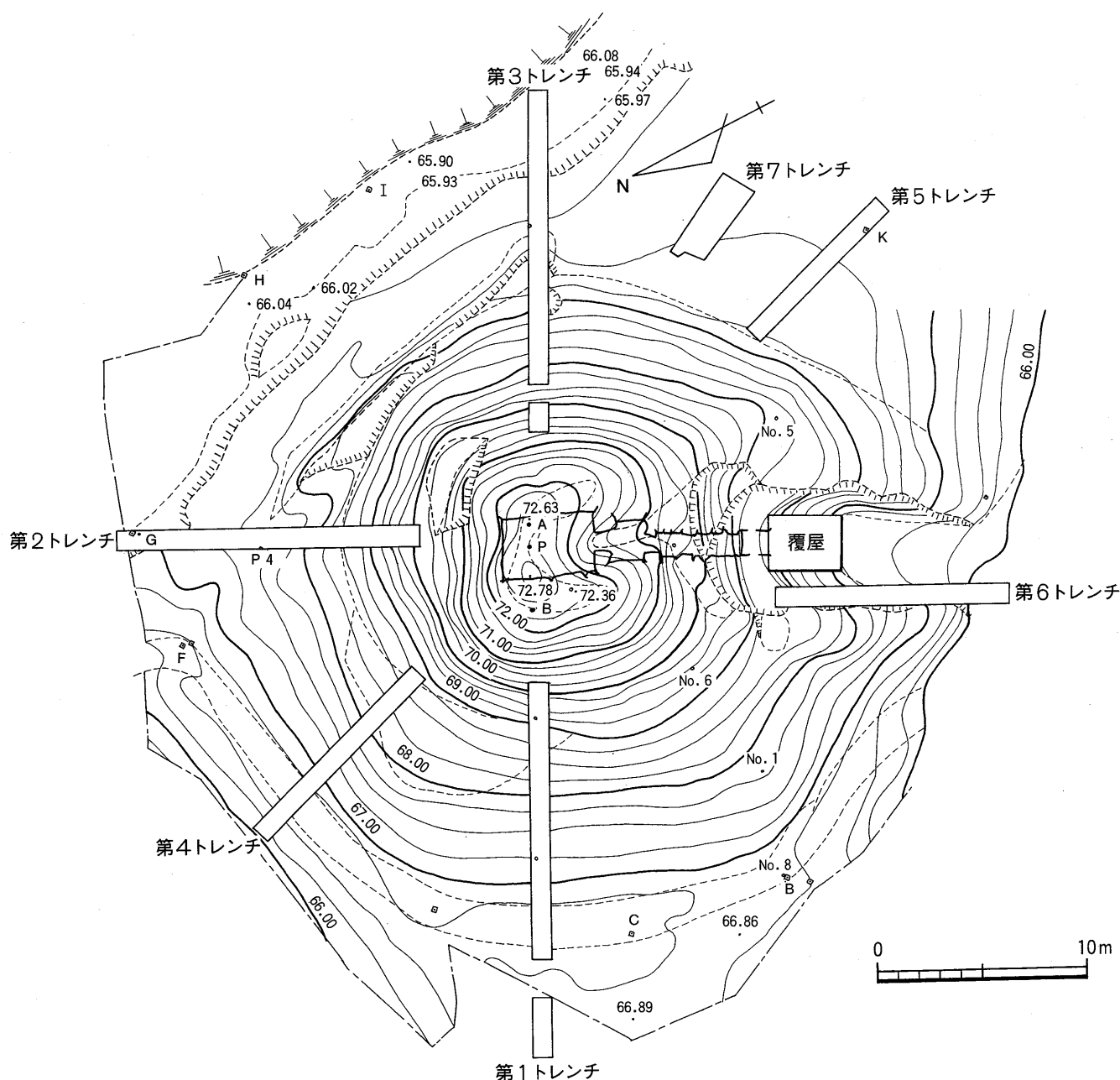
2. トレンチの設定

今回は、周溝の確認、墳丘の形態と築造法、石室前面部の構造などを解明するためのトレンチを設定した。

トレンチは東西方向（第1・3）と南北方向（第2・6）に墳丘を十文字に切り、さらに周溝とテラスを確認するためにその間に第4・5・7トレンチを設定した。その結果墳頂から放射状に、計7本のトレンチがのび、第1トレンチから時計回りに第1・4・2・3・7・5・6トレンチと配置された。なお第1～5トレンチは、すでに筑紫野市教委が、1993年に予備調査を行い、表土を取り除いていた。

石室近くまで掘り下げたのは第1・2・3・6トレンチで第4・5トレンチは墳丘下半部から周溝付近に限定し、第7トレンチは周溝上面の確認にとどめた。

各トレンチは墳頂（以下P点）を基準とし、第2トレンチは第1・3トレンチの北壁を結ぶ線上にあるP点をその線上で東側に1.0m移動した点（以下A点）、第6トレンチは同一線上でP点を西側に3.14m移動した点（以下B点）を基準に設定した。



第2図 五郎山古墳トレンチ設定図（縮尺1／300）

なお、第1トレンチでは、土堤があるかどうか確めるため、トレンチの西端から1.73mはなして延長トレンチを設けた。また、第3トレンチでは、墳丘上半部の盛土の状況を調べるための延長トレンチを、墳丘側に0.8m離して設定した。

各トレンチの規模と位置は第1表と第2図に示す通りである。

第1表 各トレンチの規模一覧

(単位=m)

トレンチ名	基準点	長さ (基準点からの距離)	幅
第1トレンチ	P	13.25 (6.45～19.70)	1.00
第1トレンチ延長部	P	2.87 (21.43～24.30)	1.00
第2トレンチ	A	14.33 (5.29～19.62)	1.00
第3トレンチ	P	14.15 (7.65～21.80)	1.00
第3トレンチ延長部	P	1.41 (5.43～ 6.84)	1.00
第4トレンチ	P	10.77 (8.03～18.80)	1.00
第5トレンチ	P	8.83 (14.47～23.30)	1.00
第6トレンチ	B	11.16 (11.75～22.91)	1.00
第7トレンチ	P	4.30 (15.50～19.80)	1.60 (墳丘側) 1.80 (周溝側)

3. 調 査 結 果

五郎山古墳はこれまで漠然と、上半部を大きく失っていると考えられてきた。しかし、今回の各トレンチの調査結果を総合すると、当初の墳丘の姿をよく留めており、周溝とテラスをもつ二段築成の古墳であることが判明した。

墳丘の外側には地山を掘り込んだ周溝が、石室の羨道部付近を除いて全周する。周溝の内側は平坦面（下部テラス）ができる。墳丘下半部（下部墳丘）はそこからゆるやかに傾斜しながら上昇しており、墳丘上半部（上部墳丘）との境はもう一度平坦面（上部テラス）となる。上部墳丘はここから急傾斜で立ちあがっている。したがって本古墳を横から見ると、あたかも麦藁帽子のような特異な外観となる（五郎山型と名付けたい）。

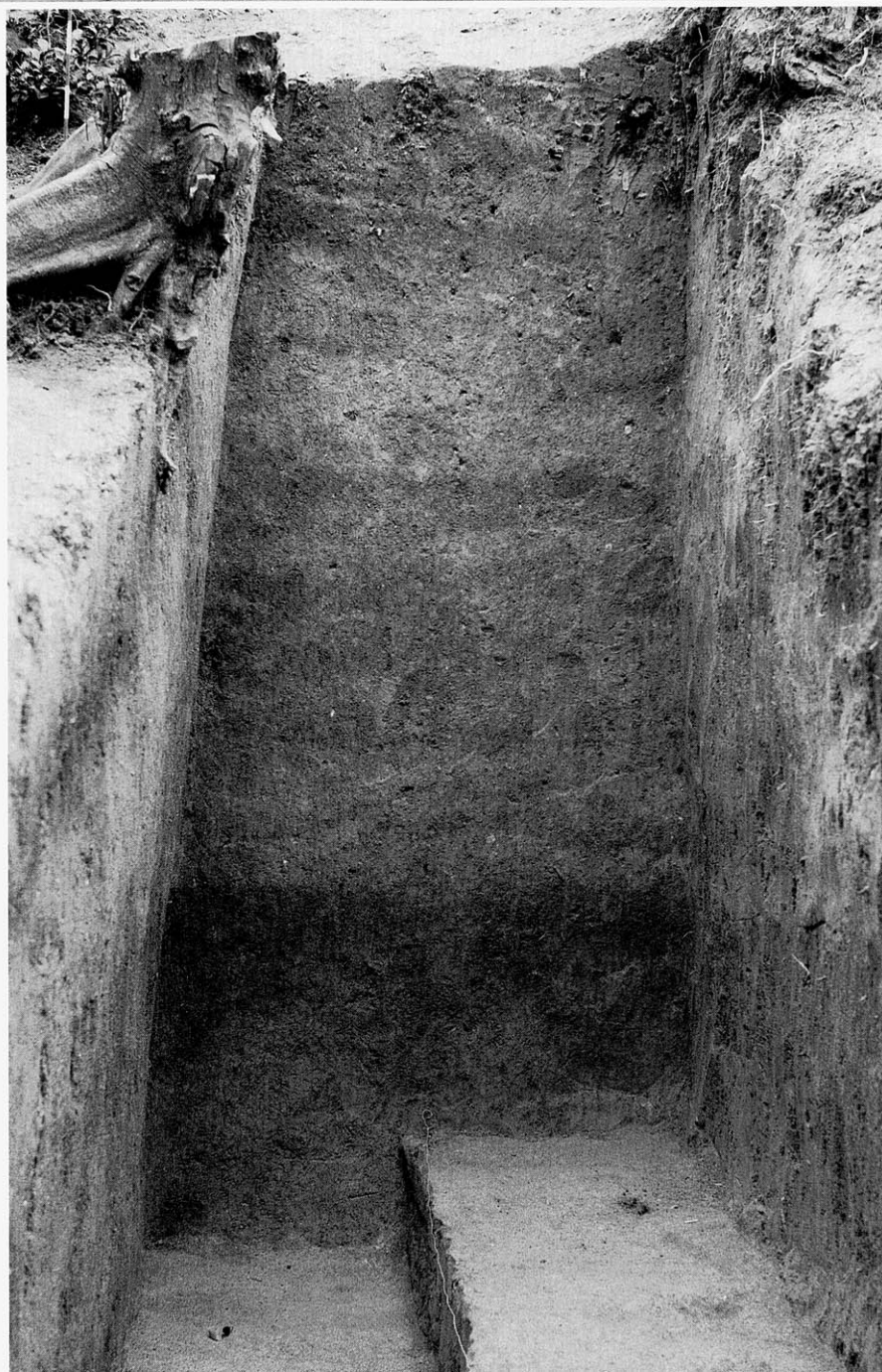
立地は東に張り出した丘陵尾根上の先端にある。上部墳丘の平面形は正円ではなく、南北16.15m、東西19.15mと南北に長い楕円形をなすが、下部墳丘では下部テラスも含めて31.17～31.27mと正円に近くなる。周溝の幅は2.03～2.78mである。

地山（花崗岩風化土）の直上には、古墳以前の包含層がのっており、下部墳丘はこの包含層を利用したり、一部手を加え、あるいは地山まで削り込んだり土を盛るなどして形を整えている。上部墳丘は、この包含層の上に、版築状の盛土を重ねており、この版築状の土を盛る際にまず外側に築いた断面半円形の土堤状の土や版築状の土の崩壊を防ぐための土もみられる。

詳細なトレンチの調査結果や数値の公表と、それに基づく墳丘の復原や築造工程の考察などは、今後の調査の成果とあわせて本報告にゆずりたい。



1. 第1トレンチ全景
(南より)



2. 第1トレンチ東壁

1. 第2トレンチ全景（北東より）



2. 第5トレンチ北東壁（周溝部）



3. 第3トレンチ延長部北壁での墳丘

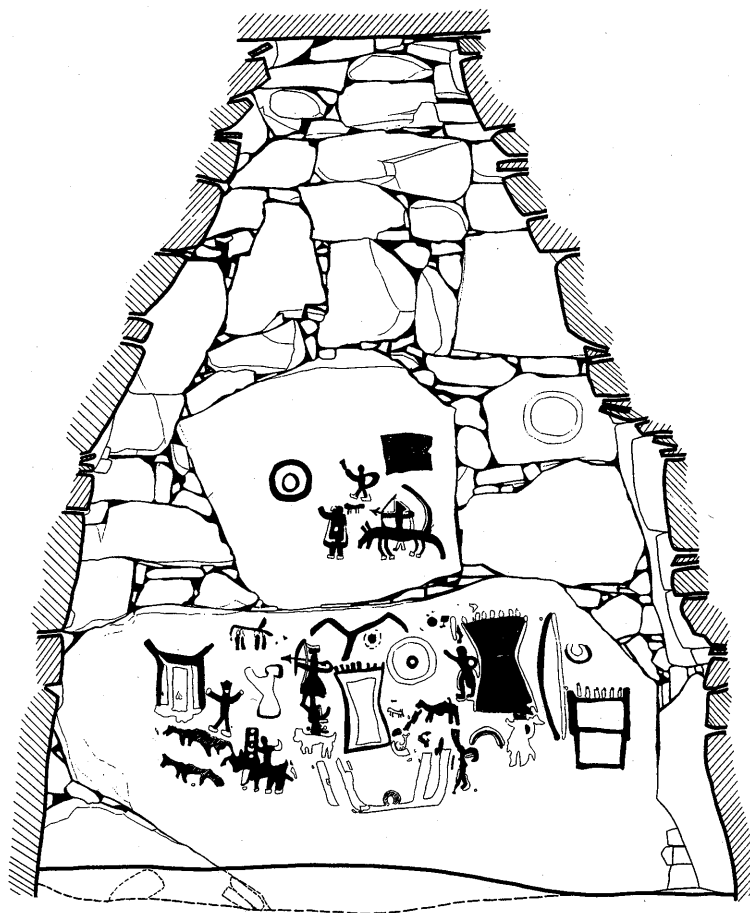




1.
第6トレンチ完掘状況（南より）



2.
第4トレンチ全景（北西より）



壁画図面
(小林行雄『古墳の話』1959 岩波新書)

五郎山古墳

第1次発掘中間報告

筑紫野市文化財報告書
第46集

平成8年3月31日

発行 筑紫野市教育委員会
筑紫野市大字二日市753-1
印刷 瞬報社写真印刷株式会社